

生活支援活動の概念の転換

やどかり情報館がやどかりの里の活動にもたらしたもの

第7回地域精神保健・福祉研究会開催に向けて

今回の研究会の全体像を描く

1. 第6回研究会を振り返って

地域精神保健・福祉研究会は、第1回から「生活支援」を大きなテーマに掲げて開催されてきた。そして、第6回の研究会から、専門職の視点で精神保健福祉の活動を見直すのではなく、サービスを利用する精神障害者の視点で活動を検証しようとする方向を転換した。その際にやどかりの里のメンバー（利用者）で、やどかり情報館（やどかりの里が運営する福祉工場）・やどかり出版で働く香野英勇さんから、「自分の人生をすべて提供する」という申し出があった。

そこで香野さんの人生をこの研究会の基盤に置きつつ、香野さんの視点でやどかりの里の生活支援活動における援助関係を見直すことになった。

2日間の研究会では、香野さんからの問題提起を受け、やどかりの里のメンバーや職員が発言し、それを受けてグループ討論が展開された。グループは精神障害者と専門職により構成され、活発な討議が行われた。あらかじめ答えの用意されていないこの研究会で、企画側と参加者の話し合いにより導き出されたことは、以下のような内容だった。

「人としてみなされない関係性が基盤にあるときには、すべての関係性は樹立しない。それどころか、その逆に専門性は役立つものではなく脅威になっていく。また、病気の部分だけを見た関わりや、専門職が患者や対象となる人を100%理解しようとする姿勢も望まれていないことが明らかになった。

そして、主体性を基盤に置いた援助関係が重要であるということが確認された。援助を受ける側も、援助を提供する側も、それぞれが主体的に生きる人間であるということを基盤に置くことが大切である（詳細は「響き合う街で」No.12を参照）